

受講番号 19095 学校名 東津野中学校 氏名 溝渕 芳子

研究の背景

研究対象(学年、クラス等) 1年生 生徒数 14名
 科目名 1年生 単位数(授業時数) 3時間 使用教科書名 NEW CROWN English Series1(三省堂)

クラスの様子・特徴

明るく元気よく、クラスの生徒同士も仲良く、良い雰囲気の中で授業はできている。男子11人、女子3人という男女比はあるが、班活動やペア活動もスムーズにできる。その反面、基礎学力や理解力に差もみられるが、前向きな姿勢で授業に取り組んでいる。

問題の確定

「聞く」「話す」活動には意欲的であるが、「書く」活動に対して苦手意識がある。

予備調査

A 授業の観察

全体的に授業には前向きに取り組める。「わかりたい」「積極的に発表しよう」という意欲もある。しかし、「話すこと」ができて、その話した英語を書くとなると「音」と「文字」をつなげて書くことにまずきがある。

B 生徒による授業評価

ほとんどの生徒が英語の授業を「楽しい」と感じている反面、「書く活動」「読む活動」に苦手意識を持っている。しかし、英語の学習に対しては前向きな意見が多かったため、学習意欲を保ちながら、生徒の抱えている問題を解消できるように取り組んでいきたい。

C 学力データ

「聞く」「話す」活動においては大変意欲的に取り組み、実技テストでの到達度も高かったのに対し、「書く」活動にはあまり積極性が見られず、定期テストでも到達度は高くはなかった。

リサーチ・クエスチョン

話した英語を文字にすることができる英語の「音」と「文字」が一致するようになるには、どのような指導が効果的であるか。

仮説・実践・検証

仮説1

ウォームアップにフォニックスを取り入れ、アルファベットの音読みを練習することにより、単語を音に出して読むことはできるようになるのではないかな。

実践1

副教材で使用しているe-naviを使ってアルファベットの音読みの練習をウォームアップに取り入れた。さらに、前授業のターゲットセンテンスを口頭練習した後に、その言った一文を見ずに書く活動を取り入れた。

検証1

フォニックスを扱うことによる英語力への波及を目標として取り上げたが、「音」と「文字」の連結への即効性はあまり期待できるものではなかった。しかし、一方で文字と発音の関係に興味を持つ生徒が確実に増加し、未習の文字でもフォニックスを使って読もうとするようになった。

仮説2

未習語を発音できるように、フォニックスと共に説明すれば音と文字へのつながりが出てくるだろう。さらに、「音」から「文字」へのつながりをもたせる為に、毎回1語のみを単語テストしていけば、「書く」ことも意識するのではないかな。

実践2

授業の導入で取り入れている「弾丸インプット活動」の中で未習語の導入にフォニックスを取り入れ、インプット活動をペアで実施したあと、1分間の勉強時間を取る。その後で1語だけ単語テストを実施する。

検証2

アンケートから、「弾丸インプットは単語を覚える際に役立つ」と感じてた者は14人中14人、「書ける英単語が増えたと思う」の質問には14人中14人の結果であった。生徒一人一人の理解度や到達度に差はあるものの、それぞれが自分の中で書ける単語が増えたと思ってくれたのは、それなりの成果ではないかと思う。

仮説3

日々の授業で「書くこと」の時間を取るようし、口頭練習した後にその一文を書くようにしていけば、音と文字を意識しはじめるのではないかな。1学期の時点ではあまりうまくできなかった「ターゲットセンテンスのディクテーション」を今のこの時期に再度挑戦してみれば、以前書けなかったものも書けるようになっていないかな。

実践3

既習單元ごとに取り扱う基本文の復習をし、その文を口頭練習をした後に書くテストを行った。

検証3

1文テストの方は、定期テストの中に練習した基本文を取り入れ検証としたが、約5割の正解率だった。1学期の時点では約5割の生徒しか正確に書けていなかったが、再度書いた時には約8割の生徒が正確に書けるようになっていた。また、間違っていた生徒の間違いも、以前の間違い方の内容より、音が意識された間違い方になっているので、それぞれの生徒の中での進歩はあったと思われる。

研究の成果

授業の導入時に英語を「読む」→「書く」→「テスト」という流れを定着させることで生徒の集中力が高まり、授業に落ち着いて取り組むことができた。そして、英語の音から入ること、「読むこと」が英語を書くことができるようになるための第一歩だということを生徒は実感できたようである。また、肯定的な評価をつづけることで、生徒の意欲を高めることができた。さらに、今回の取り組みにより、待つことの大切さを改めて実感できた。

今後の授業改善の課題

今回のアクションリサーチで感じたことは、教師側があせらずにじっくりと待つことが大切だということである。どんな力をも高めるにしても、生徒の実態や意欲を第一に考えなければならぬことに改めて気づいた。生徒一人一人のハードルに対しての進歩をとらえるために、各生徒の成長が分かるような試験ごとの記録は忘れず大切にしていきたい。

リサーチについての問合せ先:

職場電話

0889-62-2511